

今年もオクの田んぼの草刈りをして



今年もオク（奥）の田んぼの草刈りをした。50平方メートルあるか、なしか。そんな小さな田んぼである。富有柿が2本植わっている。山の木が大きくなって全く陽が当たらない。細い草がぱらぱらと生えている程度で、草刈りは直ぐに終わる。田植え後の草刈りの最後の場所である。この田んぼの草刈りを、その必要もないのに毎年1回だけ7月上旬に欠かさずしている。どうしてだろうか、と初めて自問した。

後1ヶ月で19歳になる昭和33（1958）年7月1日、母と2人でこの田んぼの田植えをしたことが、脳裏に鮮明に甦ってきた。なんと68年前のことである。今まで意識したことはなかったけど、なるほどそうだったのかと納得したのだった。

「受験だけさしてくれ。万一合格しても行かへんきに」と父に約束して東京教育大学を受験した。ところが運良く合格してしまった。叔母さん（父の妹）が三日三晩父を説得してくれて、父と叔母さんの前で、「卒業したら帰って来て家の後を継ぎます」と約束してやっと、父の「進学許可」が出た。

東雲寮へ入寮した。1年生5人を入れて全員で18名のこぢんまりした寮だった。寮の直ぐ近くを井の頭線の電車が早朝から夜中まで引っ切り無しに走っていて、その騒音にまいてしまった。一番大変だったのは、井の頭線、山手線、地下鉄丸ノ内線乗り継いでの大塚の本学への通学だった。朝の混んでいることにびっくり、やっと乗車したら全く身動き出来ない。1年生の寮生5人、井の頭線駒場駅へ一緒に行っても、乗るのはばらばら、大学へ他の4人は来ているのかどうか分からない。田舎者には、この朝の通学は耐え忍ぶのがやっとだった。



これは、自分から進んで上京したのだから何とか我慢出来たが、母親の顔

を見られないのが何としても辛かった。高校卒業までは、朝起きれば母親がそこに居た。そんなことを毎晩思いつつ、やっと帰省する日がやってきた。

6月30日、昼過ぎの九州門司^{もじ}行きの普通列車で待ちに待った帰郷の途にいた。7月1日昼過ぎて上高瀬駅に着いたと思う。駅から4キロ余りの道を歩いて帰った。食事はどうしたか記憶にない。家の近くの田んぼで居た父を見て、「お父さん、もんたきに。お母さんは？」と訊いた。「オクの田んぼへ田植えに行つとる」と教えてくれた。オクとは、青井谷（現在の自治会名）という谷の民家が無い奥の方のことで、そこに我が家の小さい水田が6枚あった。そこへ行くには人間が通れるだけの細道しかなかった。谷の一番奥にあった今草刈りをしている田んぼだけが、40年程前の耕地整理にかからず現状のまま残ったのだった。

母を探して行ったら、一番上の一番小さな田んぼで、その年最後の田植えを始めようとしていた。

「お母さん！今もんたきに」

「もっと先かと思ひよったのに、はやもんたんか」

「今日から夏休みじゃ。昨日授業が無かったきに急いでもんてきたわ」

と言って、私は裸足になり、ズボンと上のシャツを脱ぎ始めた。

「手伝うたりせんでえ。これで終わりじゃけん、家で待っちゃれ」

母の言葉に構わず、母の田植え定規の前へ行き、母の横に並んで田植えを始めた。小学校2年から高校卒業まで、毎年こうして田植えの手伝いをしたなあ。今年も少しだけ出来たと、何とも爽やかで嬉しかった。

そんな気持ちの中でひよいと思い出したことがあった。それは小学校2年生で初めて田植えの手伝いをした時でのことでなかったかと思う。母はこんな話をしてくれた。

「自分が小学校1年の秋に、父親（百太郎）が、納屋の2階から落ち込んで



大怪我をして亡くなった。おばあさんとおっさんと自分の3人家族になった。小さい私に合わせて、自分の母を「おばあさん」、兄を「おっさん」と言ってくれた。小学校高学年のおっさんと小学校1年の自分は、学校から少しでも早く帰って、毎日毎日母の田んぼの手伝いに明け暮れた。近所の子供は遊んでいたのにのう。でも遊びたいとは一つも思わなかった。勉強もせんかった。それだけは悔やまれる。健一、勉強だけはせないかんぞ。勉強した頭は、落としたり盗まれたりせん。自分だけが使う自分の宝になる。」

昭和の終り頃、上高瀬音田地区の耕地整理をした。オクの谷は小さな水田が50枚以上あっただろう。それが現在はへりの小さな2枚の水田を入れて全部で8枚になっている。そのうち3枚は管理されているが5枚は管理放棄地になっている。二車線の町道が県道大日線へ抜けて便利になっていて、以前のオクの谷の面影は微塵^{みじん}もない。

今草刈りしている小さい田んぼは、耕地整理出来ずに残ったオクの谷で唯一の田んぼである。当時は日当たりも良かったから、父は富有柿を2本植えた。今は田んぼの上の畑だった所は山になって雑木が大木になって、全く陽が当たらなくなっている。2本の柿の木は日陰で何とか生きているだけ。

こんな小さな元水田の草刈りを、しなくても良いのに毎年している。母と並んで田植えをした最後の思い出の田んぼだからだろう。そして草刈りをしながらいつもこんなことを思い出している。母と並んで田植えしていて、夕方暗くなってくると、植える場所を示す田植え定規の印が見えなくなってくる。完全に見えなくなってくると母が、「はや、7時45分か。止めて急いで帰ってご飯の準備せないかん」いつも家へ帰ると丁度8時頃だった。晩ご飯が終わると、父と母は苗代へ苗取りに行った。（令和8年8月1日）

